平成２８年５月１９日
教育課程部会
中学校部会
参考資料１

第１回中学校部会（平成28年４月21日）の概要

１．各班の発表の概要

（１班発表の概要）

○　生徒自身の課題については、中学校は思春期の真っただ中に突入するというところで、自己肯定感が低かったり、心と体の成長のアンバランス等の問題がある。また、社会の当事者としての意識も低い部分があるだろうということ。もう１つは、学習や生活への適応に関する課題。自信のない生徒が多く、また、学習意欲が小学校に比べるとやはり低下をしているのではないだろうか。そして、特別な配慮が必要な生徒への対応もかなり複雑化しているのではないかということが話題にあがった。

○　次に学校及び教員の課題。アクティブラーニングについては、その趣旨をどこまで周知ができているのか、また、アクティブラーニングに明るくない教員をどのように研修していくのか、養成をしていくのか。この辺の課題意識を持つべきであろうという意見があった。

○　中学校は高校受験が絡んでくるので、受験と学力観についても議論した。１つは、まず学力差。中学になると学力差が出てくる。受験を諦めてしまうという実情が出てきたり、基礎的なものが身についていない子供たちも出てくる。それらをどうフォローしたらいいのかというところ。また、受験対策があると体力が低下してしまうという問題もいわれている。アクティブラーニングと高校受験を比べてみると、ここにミスマッチが存在しないかということ。受験用の勉強とアクティブラーニングをどうマッチさせるのか、これは大きな課題であろうという意見も出た。

○　教員を取り巻く課題について。１つは生徒指導と家庭の問題。また、教員の仕事が量的にも幅の面でも非常に広がっていること。そして、優秀な先生を確保することが非常に難しい状況もある。教員の中では前例踏襲の意識がまだまだ強くて、新しいものを取り入れていく踏み出しが出来づらい、そのような話も出た。また、そもそも教員などのスタッフの決定的な不足、人材の不足という話も出た。

○　道徳教育と英語についても議論があった。道徳教育は生徒にとって意義ある内容にしなければならないが、それを今後、どのようにやっていくべきか。英語については、英語嫌いがまだまだ多過ぎるのではないかということや、短時間学習をどのように取り入れていくのかということ、また、英語教育の高度化も視野に入れていかねばならないということも話が出た。

○　小学校とは異なる中学校独特の問題は、教科横断的な考え方がどうしても不足しがちであるということ。これについても課題であると認識している。

○　地域との関係については、地域の教育力をいかに活用するかということ。例えばボランティア活動、福祉領域との連携、地域のOB・OGの参画、企業との連携、家庭との連携。東京都も推進しているオリンピック・パラリンピック教育の充実、そのあたりからも子供たちの力を付けていくことにつなげることができるのだろうという意見があった。家庭の教育力の低下が叫ばれているが、特に父親が教育にどれだけ参画できるのか。また、家庭環境がかなり変化していて、格差もある中で、それらが教育とどうリンクしていくのかということも課題であろう。

〈１班　発表用資料〉

生徒自身の課題
学校・教員の課題
地域との関係
アクティブ・ラーニング
思春期
教科間連携
格差
受験と学力観
学習・生活への適応
教員をとりまく課題
地域の教育力の活用
家庭の教育力

（２班発表の概要）

○　上段は、子供に身に付けたい資質・能力。中段は、子供たちの資質・能力を育むカリキュラムの課題にあたる。この課題を解決するためのものとして、アクティブラーニングの視点が今回導入されつつある。さらに、小学校教育と中学校教育の連携について。個人的に思うことは、中１ギャップは小小格差からきているのではないかということである。つまり、複数の小学校から上がってきたときに、学習規律や意欲の点で、学校間格差がそのまま中学校の課題につながっているのではないかということで、カリキュラムの中に入れている。下段は、カリキュラムの改善や授業改善に関わるものとして、教師の力量をどのように育てていくかということである。中学校の問題としていつも言われるのは、授業改善、子供との関わりは一生懸命やりたいのだけれども、時間がないということである。つまり部活動による多忙化がある。一方部活動をやることによって生徒指導の問題を何とか解決しているという学校もあるという現実がある。社会に開かれた教育課程に関しては、色々なところに関係しているので、青い下線を引いている。

○　子供に身に付けたい資質・能力については、これからの時代、地域を理解し、貢献する力や将来設計する力、困難なことや新しいことに挑戦する力、こういうものが必要である。いわゆる汎用的な能力であるが、一方で従来的な意味での学力の差はやはり否めない。このような学力差が生じてしまうのは、１つは授業が一方的な授業でとどまっているのではないかということ。それに対する１つの改善として、今回文科省が提案しているのがアクティブラーニングの視点からの授業改善である。

○　カリキュラムの問題としては、教科別指導の限界がまだまだある。また、総合的な学習の時間が、小学校の方が充実していて、中学校の方が体験で終わっていたり行事で終わっていて、場合によっては教科の補充で終わっていて、子供たちの中で意欲が減退している。あるいは、職場体験も日数の面や質の面で改善の余地があるかなと考えます。

○　授業自体の改善に加え、教科横断的な視点や総合的な学習の時間の充実、職場体験の充実、このあたりがとても大事だと言われている。授業の改善やカリキュラムの充実を考えていったときに、何が必要か。それは教員の指導力である。教師の指導力をしっかり鍛えていく必要がある。

○　外国語教育における教科書に関しては、社会や生活との関わりが弱く、発達段階に応じた知的欲求を満たしていない面がある。授業ではきちんと生きた英語を活用できるような指導が必要で、もう一度外国語教育の教育目標を見直さなければいけないという話があった。

○　学習指導要領を変えていったとしても、小中連携を図ろうとしても、中学校の先生方から出てくるのは、必ずと言っていいほど、「その気はあるのだけれど、忙しい」「土日も部活に行っています」「時間がない」と。部活動で頑張っていることによって、子供同士のコミュニケーションや、主体性が培われる面はあるけれど、新しい授業作りやカリキュラムの充実に時間を割けない原因にもなっている。そこで条件整備が必要だが、今回の社会に開かれた教育課程というテーマからすると、子供たちが地域に出掛けていって、本当の意味の職場体験（子供の自己理解だけではなく、職場体験を通して地域理解を実現するような体験）をしながら、本当に将来の地域を担う、あるいはそういう意識を持った人材を育てていかなければいけない。地域の力を借りながら、部活動も含めた先生方の仕事に関しても支援をしていただくということが大事だという意見が出た。

○　今回、カリキュラムマネジメントという言葉が言われており、部活動において、地域にある教育力を生かすためには、学校と行政と地域との全体のコーディネート、学校内でのカリキュラムマネジメントを超えた地域のカリキュラムマネジメント、こういうようなことをしっかりやっていくということが、最終的には子供たちに力を付けるためのカリキュラムの充実を実現するための教師の指導力を高める、そのための研修時間の確保にとっては大事である。そうしないと、学習指導要領を改訂しても、現場における実行に十分につながらないのではという話になった。

〈２班　発表用資料〉

（３班発表の概要）

○　３班は教員の労働環境に関する問題から話から出た。例えば日本の中学校に固有な問題としての部活動の問題。ここにとてもエネルギーをかけていて、もちろんそれで生徒指導がやられているとか、子供との関係が形成されているということもあるし、子供もそこに居場所があるということもあるのだけれども、そもそもなぜ部活動で生徒指導をやらなければいけないのかという話にもなる。授業を改善するということではなぜいけないのか。あるいは、学校で教えるべき内容や目指すべき人材像が随分変わっているのではないかという話がそこから出てくる。中学校の先生方が頑張っている方向がずれているのではないか。少し以前のいわゆる工業社会に合うような人材像をどこかイメージしているのではないか。その結果が、子供からも受け入れられないし、うまく回っていかないのではないかという話になった。

○　根源的な問題は、社会像や人材像が社会の変化に伴って転換していることではないか。相変わらずオールマイティーにオール 5 あるいは平均的な知識をたくさん持っている子供を育てようと頑張るのは、もう違うのではないか。人材像がどう社会的に変化しているか。それに伴って、カリキュラムの質、知識や学力の質が今回どう転換しようとしているのか。今回の学習指導要領改訂の議論をどうやって伝えていき、実現化していくのかということについても議論があった。

○　新しい社会像に基づくカリキュラム領域として、例えばワークライフバランス等自身のキャリアやライフプランに関することがちゃんと扱えていないのではないか。子供たちが将来どんな仕事に就いて、社会に出ていくかということを子供たち自身が学ぶ場や学ぶ機会がまだまだ少ないし、先生もそこを余り大切にしていないのではないか。それらに関して、地域との連携もうまくいっていないのではないか。地域からいろいろな人に来てもらっても、相変わらず正解とか知識を教えてもらう人になっているが、そうではなくて、その人たちが日々実践している営みを子供と一緒にやるというふうに発想を変えれば、多分変わっていく。探究的な授業イメージに変えていけば、地域人材の活用とか地域社会との連携も質が変わってくるはず。だからこそ、学校がどんな学力論をもって、どんな人材像を目指していくのかということの抜本的転換と、それの具体化が大事ではないかということ。そうすると、部活動で生徒指導をして学校の秩序を維持しようという発想も変わってくるのではないか、あるいは部活動の中身も変わってくるのではないかという議論があった。

○　教員の研修や専門性にも問題があるのではないか。教科専門性が高いというけれども、高校に比べれば低いし、小学校から見れば、子供の側に寄り添うとか教科を超えたということができていない。中学校の教科の専門性をどう考えるかということは大事な問題。一方、新しい課題としてのプログラミング、情報教育や英語等についても対応していかなければならない。以上を踏まえた研修の在り方については、上から下に教えるような研修の機会を増やしていくことにも限界がある。1 つのやり方は、日本の学校教育が誇るべきものとして、いわゆる授業研究がある。これはレッスンスタディという名前でむしろ日本が海外に輸出して、海外の授業の質を上げているが、医者がやるようなカンファレンスのような営み。チーム学校というのは何も仕事をするだけではなくて、自分たちの授業を内省して、自分たちの研修を深めて、気付きを深めていくということもあるわけで、そういった機会を 1 つの研修の柱にしていく。

○　それはある種の子供研究にもなる。子供というのは一般的にどういうものか、あるいはこの子がどういうものかということを授業の具体を通して、みんなの知恵を合わ

せながら、その意味を読み解いていくような研修、研究を中心にして専門性を上げるという筋道もあるのではないか。また、そうすることで、子供１人１人が今どういうありようをしている、どんな可能性があるかということの見方、考え方を質的に転換することが大事で、そういった授業の事実や子供の事実を丁寧にみんなで議論をして、洞察を深めていくような在り方の中で形成できてくるのではないか。現状は、どうすればいいのかではなくて、子供がどういうふうにいるのかということの洞察が弱いのではないかという議論があった。

○　現在、社会像や人材像の転換ということと、子供というのはどういうふうに学び、生き、育っているのかということの研究が同じ方向を向いている。つまり、産業主義の時代には、正解を大量に蓄積して、それを定型的に実施できるということが要求されていたわけで、すると、１人１人の子供が自分で考えて、自分で判断して、協働的にそこに価値を生み出していくような学力論や知識像というのはむしろ都合が悪かったのではないか。だから、これまで特に中学校はそれをある種子供の本性に合わない形で抑え込んで、知識を注入する。知識を注入されると子供は余りおもしろくないので落ち着かない、たから部活動で居場所を作って、それで生徒指導を円滑に進めて秩序を維持するという構造になっていたのではないか。ところが、社会像、人材像が変わってきたことで、自分で考えるとか判断するとか、協働的に価値を生み出すとかいうことが学力の中心になってきて、それは子供の本来の学びや知識の在り方と同方向を向いているので、そのことに今気付いて、その方向で修正していくと、全体が好循環に向かっていくのではないか。つまり、１つ１つを抑えていくのではなくて、何らかの好循環を生み出すようなシステムとかサイクルを考えていくということを教育課程行政の中で考える必要があるのではないかという議論があった。

○　以上の様なことを踏まえると、カリキュラムマネジメントということが中核的な概念になる。カリキュラムマネジメントはまだまだ中学校では弱いのではないか。特に教科セクトに分かれていくので、それを超えた視点を持つことが必要だろう。あるいはもっと実務的なところで、ICT 化を適切に推進して、それがサポーティブになるようにしていく必要もあるだろう。

○　学校間接続ということを考えたときに、下は小学校、上は高校という、間に挟まれている難しさがあるが、小学校、高等学校改革が進んできている中で、中学校が乗り遅れてしまう可能性がある。小学校、高校の改革をうまく受け止めて、意識の改革を具体的なシステムとしての好循環を生み出すような改革に結び付ける手立てを今回考えていく必要があるのではないか。

〈３班　発表用資料〉

２．各班の発表を踏まえての意見交換

○　今回我々は、カリキュラムや授業の質的改善を目指していると思う。そのことを幼小中高、縦の関係の中で十分共通理解されるということと、学校、家庭、地域と、社会全体として認識する必要がある。

○　１班の発表にあった、受験と学力という論点、受験とアクティブラーニングの視点からの学びは反するのではないかという話について。今回、思い切った学力論の明示化をしていて、社会に開かれたという方向で学力育成ということを資質・能力としてやっていくけれども、結局、受験という話が出てきてしまう。中学校は部活と受験という論点があり、高校入試については、多くは公立学校だとすれば、公立高校の入試は都道府県教育委員会が所管しているのだと思うが、そこの改革というのはどういう枠組みとか仕組みで転換していくのか、あるいは、それに対して国のレベルで何かやっていけることはあるのか。大学入試改革は、理論的にも具体的にも進んでいると思うが、高校入試の問題はまだ残っていて、そこが変わらない限り、最後は建前と本音の話ではないかというふうに中学の先生はお考えになる。子供を守るという意味で、当然先生方は必要な受験指導をやらざるをえない。

○　高校入試改革の必要性については私も同意する。例えば調査書についても、通知表がいわゆる絶対評価になったときに、調査書も絶対評価にした途端に、入試のときにダイレクトにそれを反映するのが難しくなったということで、かえってペーパーテスト重視という話になってしまったりしがちで、では、アクティブラーニングの視点からの学びで培ったような資質・能力はどう評価されるのか。評価されないのだったら、少しでも受験に関係ある勉強を知識注入的にやりましょう、あるいは塾にも行きましょうというような話にもなりかねない。

○　私はアクティブラーニングと現行の高校入試は全然ミスマッチしていないと思う。それは誤解ではないか。現時点でもアクティブラーニングの視点からの授業をやっている中学校はたくさんある。そういう中学校ほど、学力をどんどん伸ばして入試を突破している。そういった事実が伝わっていなくて、アクティブラーニングをやったらいわゆる従来型の学力が付かないという誤解を解消していかないといけない。

○　アクティブラーニングの視点からの学びをやれば、かえって教科の学力もしっかり付くので、ペーパーテストの成績もむしろ上がるのであると。ただ一方では、総合的な学習の時間などでいろいろ探究したり、発表したり、討論したり、そういう力も付いているのに、そういう力はどう評価されるのか。そこは評価しないでもとりあえずはいいのか、何らかの形でそれも評価に組み入れるべきではないか。では調査書だけに頼れるかというと、調査書がそれほど客観性を持って入試の材料になるかどうかという問題もある。

○　大学入試の場合は、基本的には大学の先生方が問題をお作りになるので、高等学校の教育改革がなかなか反映されにくい構造的な仕組みがある。それに対して、公立高等学校の入試については、これは各県において中学校の先生と高等学校の先生方が問題を作っていくことになっているので、１つは、そういう構造の中で、中学校教育の変

化あるいは進化に対して、より入試問題に反映されやすい構造になっているということ。それから、全国学力学習状況調査のB問題などがかなり深く認識されているので、公立高等学校の入試の質は一定程度改善をされているのではないかと思う。高等学校においては個別作問もかなり進んでおり、チャレンジングな入試をやっているところが公立学校でも出てきているという状況であるが、他方で、今回の改訂では、知識自体の理解の質をどう問うていくのかという視点が必要。事実的な知識から概念的な知識にどう展開しているかという、そこをどう評価するかというのが今回の指導要領の改訂の大きな眼目かなと思っているので、そういった議論をさらに高校入試にどう反映していくのか考えなければならない。それに伴って、調査書の在り方や、選抜方法の改善といったようなことについて、今回の指導要領の改訂の御議論をしっかりと入試実施権者に伝えさせていただいて、改善をしていくと。その状況を私どもとしても共有していくということが大事かと思っている。（事務局より補足）

○　大学入試でもやはり同じ問題がある。高校のときに例えば探究的な学習をしたとか、そういうことを大学入試でどう反映できるのか。高校が出してくる調査書や推薦書はダイレクトに入試で客観的資料としては使えない。では、そういう力をどう評価するかというときに、例えばそういう探究の学習を通じて得た力というのはあるわけで、問題を探究して発表するとか、プレゼンテーション力とか、あるいは討論力。そういうのを全員について測定することは難しい。しかし、そういうことを一生懸命やってきて、そういう力が付いているということであれば、どこか客観的に評価してくれる機関があって、例えば、専門のそういう力を見る人がいて、プレゼンテーション検定2級とか1級とか、客観的な機関があれば、それはそこで評価してもらったのを自分で資料として付けて評価してもらう。探究的な学習で得た力というのは決して無駄にならない。そういう学生はペーパーテストの学力も付いているかもしれないが、付けた力そのものも何らかの形で客観性を持って評価できるというシステムがどこかにあって、そして生かされるということがあってよい。それは高校入試でも同様で、そういうことを一生懸命、小学校、中学校を通じてやってきたのだというのであれば、そういうことをパフォーマンスで示したり、それをどこかで評価してくれるシステムがあれば、そういう生徒も報われるのではないか。

○　高校入試も大事だが、探究的な授業をやる限りは、中間・期末テストでその成果を計ってあげないといけない。そういう問題を作ることによって、先生方はまた授業でどういうような学びを展開していくのかということを意識することになる。

○　中学校の特に社会科や理科は、レポートがほとんどないように思う。もしそういうものを入れていった場合に、また学校の先生が多忙になるということも考えないといけないが、少なくともそういう評価システムを中学校の中にも入れていかないといけない。

○　学習指導要領の内容を今の公立学校のレベルで子供たちに基礎・基本を定着させようとすれば、授業時数のゆとりが確保できないということにつながる。もちろん探究的な学習もやっていないわけではないし、評価の内容としてそういった観点も各学校で工夫はしていると思う。ただ、アクティブラーニングの視点からの授業改善を行ったときに、授業時数について、さらに多くの時間を費やすことも予測されると考えて

いる。

○　教員の資質の変化という点では、地域のカリキュラムマネジメント、地域の人材をどう導入して、どう生かすかというのは、経営者の手腕にかかってくるかと思う。そこが 1 校に任されたときに、うまく展開できるか。始めたばかりなのが、コーディネーターを生かすのも、実際は学校の手腕であるかと思う。

○　新しい方向性を理解させるためには、学力の 3 要素と子供たちに付けたい資質・能力の内容の関連性が、今ひとつ結び付かない。単純に図式化はしているのだが、そこをきちんと捉えていかないと、アクティブラーニングによって学校が変わるという単純な考え方に変わってしまうのではないかという危惧も持っている。

（主査によるまとめ）

○　学力の 3 要素と子供たちに付けたい資質・能力の内容の関連性、そのためのアクティブラーニングということが、学校にしてみると、それらの結び付きというのがぴんとこない、実感を持って受け止められていないところがある。

○　社会に開かれた教育課程というのは非常に大事なことだが、では、これまではどうだったかというと、社会に開かれていなかったのかということになる。社会に開かれていないというのはどういうことかというと、学校に閉じているということ。これまでの学習というのが、まず生徒から見たときに、中学校の生徒に何でこういう勉強をやっているのと聞くと、自分の社会での生活とこうつながっているからというふうに説明できる生徒があまりいるとは思えない。とりあえずこういう勉強をすることになっている、教科書に出ている、そういうことがテストに出るからだと。高校入試があるからだという、これが学校に閉じている姿ではないか。勉強の内容が社会とつながっているということが子供に分かるとか、あるいはこういうことをやっていると自分にこんな資質・能力が付いて、例えば自分の意見を説明したり、発表したり、討論したりするという、こういう学習活動をやっていると、将来、自分が社会に出たときもそれが役に立つ、つながっていくのだということが子供からも見えるかということが大事。先生の側も、この内容が社会でどうつながるのかとか、子供にこういう力が付いて、それが社会でのこういう力とつながりますということを中学校で先生が十分納得して教えているかというと、とりあえずこれはやることになっていますからということになっていたとすれば、学校で閉じられていることになってしまう。教育される方もする方も、社会とのつながりを見えるようにしていこうというのが、開かれた教育課程というものを表に出したことの意義ではないかと思う。

○　中学校に関しては、新しいことというのが小学校、高校に比べると今回の改訂で一見余りないと言われているが、実は根本的なところで中学校教育の課題というのはあるのだろうと思う。

以上